

### 3-CQ2-1)

分類	3 一次予防的投与
番号	CQ2-1
文献ID	PMID: 23788754
文献タイトル	The impact of the granulocyte colony-stimulating factor on chemotherapy dose intensity and cancer survival: a systematic review and meta-analysis of randomized controlled trials.
Evidence level	I
著者名	Lyman GH, Dale DC, Culakova E, Poniewierski MS, Wolff DA, Kuderer NM, Huang M, Crawford J.
雑誌名, 巻:出版年	Ann Oncol. 2013; 24(10): 2475-84.
目的	G-CSF予防投与が化学療法のdose intensityと生存期間に与える影響を検討する。
研究デザイン	メタアナリシス
研究施設、組織	Department of Medicine, Duke University, Durham
研究期間	1990年1月から2012年8月に発表された文献を対象とした。
対象患者	成人悪性腫瘍患者に対する化学療法でG-CSF一次予防的投与の有無を比較し、2年以上の経過観察期間での全生存期間のデータが報告されていた59のランダム化比較試験の登録症例
介入	なし
主要評価項目	全生存期間
結果	G-CSF一次予防的投与群の4,251例とコントロール群の5,188例が比較された。全死亡の相対リスク(RR)は0.93 (95% confidence interval: 0.90-0.96; P < 0.001)で、G-CSF一次予防的投与群で生存期間が長くなっていた。化学療法のレジメン、用量、スケジュールが両群で同一の場合のRRは0.96 (P = 0.060)、G-CSF一次予防的投与群のレジメンがdose denseである場合のRRは0.89 (P < 0.001)、用量が多い場合のRRは0.92 (P = 0.019)、薬剤が置換されたり加わっていたりする場合のRRは0.94 (P = 0.003)であった。
結論	G-CSFの一次予防的投与を用いること、および、それに伴って化学療法の強度を上げることにより、全生存期間は延長する。
作成者	高野利実
コメント	FN発症割合ではなく、全生存期間についての解析である。

3-CQ1-10)と同じ